

爪あとを残す妖怪

妖しげなモノたちを調べる機会が多かったためか、これまでも各地を訪ねては、河童の手のミイラや、牛鬼のしゃれこうべなど、不思議なモノに出会うことがあった。ある町では、葬列を襲う火車という妖怪を退治した折に残っていたという爪を見せてもらったことがある。さすが、爪あとを残すとはよくいったものだ。

雷の伝承と雷獣

そこで思い出すのが、雷の爪。雷といえば、古河周辺では「富士西の三把稲」といって、富士山の西に雷雲が見えると、稲を三把刈り取るまでに雷雨がやってくるといわれた。それじゃあ雷は困るかといえは「雷が夏にたくさん鳴ると、秋は豊作」ともいった。でもやっぱり当たるとコワイもの。落雷が原因で火災になることもあり、雷よけの御札を貼るお宅もあった。市内のある家では、1月14日にヌルデの木で箸を作り、翌

日小豆粥に浸し神仏に供えた。雷が鳴るとこれを囲炉裏で燃やして雷よけのまじないとした。身近なところでは、おへそを取られてはなるまいと、蚊帳の中にとびこんでは「くわばらくわばら」なんてことも。

ところで、雷の爪とは、さきの火車の爪なるものに似ている。仏説をとく『山海里』（1852年）という書物には、京都のお寺の台所で発見された「雷獣」の爪が紹介されている。落雷があると、そこに現れるという雷獣は、日本各地に目撃談があり、その姿が記録されている。イヌのような、イタチのような、アナグマのような



▲雷獣の爪 (『山海里』八篇上)

……、ところによってはタツノオトシゴのようなものも。曲亭馬琴に至っては、足が6本だと図入りで紹介していますが、なんだか足が絡まって転んじゃいそう。

うまいのか、いるのか

そんな雷獣は畑の作物を食べてしまうというので、雷や夕立より厄介だ。江戸時代の随筆を読んでみると、栃木県烏山地方では、そうした被害に遭わないためにも、春になると雷獣を捕獲するという話が出てくる。また、高知県では、春ごとに山の中で雷獣を討ち取り、食べるのだと書かれているものもある。そしてなんと、その味

が海で獲れるホシザメのようで、とてもうまいのだと。あの爪あとを残した妖しげなモノが「美味」であると記録されている……。もう、居るのか居ないのか分かりません。

明治時代、三遊亭花遊という落語家が演じた小話に「雷獣の話」とやらがある。雷獣鍋なる看板を掲げる店があるというので、うまいかどうか分からず、入ってしまった。おいしくなかったらイヤだなと思いつつ料理を注文するが、出てきた鍋をのぞき込むと煮立った湯だけ。オイオイ野菜も雷獣も入っていないぞと愚痴をこぼすと、店員「値切っているのだから、湯う立ち(夕立)だけです」と。

江戸時代の食材辞典には、河童の特性をもった生き物が載っているものもある。ならば小話に過ぎない雷獣鍋ぐらいあってもよからう、そして雷獣ぐらい居てもいいんじゃないかと、そんな広い心持ちになれるのである。それにしてもどんな鍋だったんだろうか。

古河歴史博物館学芸員 立石尚之

【児童書】

6+1の不思議

齊藤洋 作

小学校の同級生たちが子どものときに体験した奇妙なできごとを本にしてほしいと頼まれた作家の“わたし”は、50年ぶりにみんなと会って話を聞くことに…。子ども時代特有の「記憶」と「思い出」がわきおこる不思議な物語。

出版社…講談社

【絵本】

ぼくのじゃがいも

ジョシュ・レイシー 作

ペットが欲しいアルバートに、パパがプレゼントしてくれたのは、なんと、じゃがいも！ アルバートはじゃがいもをペットとしてかわいがるようにありますが…。生き物の伸びやかな生命力が印象に残る、ゆかいな物語。

出版社…こぐま社

図書館の本棚から



古河図書館

【一般/小説】

新古事記

村田喜代子 著

太平洋戦争のさなか、そうそうたる科学者たちが続々と集結。秘密裏に進む原爆開発、施設内の出産ラッシュ、何も知らず家事と子育てに明け暮れる学者の妻たちの平穏な日々…。日系三世の数奇な物語。

出版社…講談社

【一般/小説】

グレート・サークル

マギー・シプステッド 著

1950年、地球一周飛行挑戦中に消息を絶った女性飛行士。2014年、その飛行士役を演じるようになったハリウッド女優。

残された航空日誌が2つの人生の円をつなぎ…。壮大な時間と場所を巡るパラレル・ストーリー。

出版社…早川書房



正月の羽子板 昭和32年



ファインダー越しの昭和時代

Time Travel Photographer

正月に羽子板を楽しむ青年たちのどかな時間が流れているのが伝わります。大通りには、着飾った親子連れや田舎から出てきたであろう人たちが歩いており、にぎわいを見せていました。

古河市在住写真家 鈴木路雄さん

